

# ホトトギス

三月号

ホトトギス 第三十二号  
昭和二十二年三月  
発行所 東京 日本書局  
定価 洋一円二角



## 俳句随想〔四百十七〕

汀子

二〇一七年、平成二十九年は正岡子規生誕百五十年になるといふ。子規は享年三十五歳という若さで生涯を閉じた。その短い人生の中で、俳句革新運動、その他、数々の事を意欲的にされ、遣り残したことは、色々弟子たちが継承して行つた。その一つに「山会」がある。子規の病床の枕頭で開かれた「山会」は、子規亡き後も継承されてきた。毎月、虚子の許、その後、年尾の許、今は私が受け継ぎ、毎月、東京に於て開催されている。ホトトギスに載っている写生文は必ず、毎月「山会」で読みあげられて、最終的に私が合格としなければ、載せることは出来ない。そのメンバーは、私を含め、いまは十人であるが、長いメンバーの一人だった副島いみ子さんが、高齢のため施設に入られて遠い距離の出席が叶わずお休みが多くなつた。他に、投稿者の文章をメンバーが読み上げて、合否を決めている。担当はホトトギス社の小林一行が投稿者の整理と連絡を受け持っている。

子規の生誕百五十年を記念して横浜の神奈川近代文学館に於て「正岡子規生誕記念展」が開催され、その一つに「山会」が取り上げられる。私と長谷川權さんと二人の作家によるイベントが計画されている。日時は平成二十九年四月三十日である。どのようなイベントになるかこれから詰めていくが、「山会」は夏目漱石、伊藤左千夫等の登竜門でもあつた歴史を緋いて行きたい。

「ホトトギス」の歴史の一齣が再現されるこの企画に私は協力を惜しまない。

句日記 汀子

平成二十八年三月二日 ロイヤル俳壇

早々と三月の旅組まれある春の雪降りしを知らぬ者同志早朝の春の風花ほどのもの三月といひて油断のありしこと鄙の野に曲水ありと聞きしより

三月五日 芹屋ホトギス会

邂逅の春めく話つゞきけり燕まだ見かけぬことに心置く虚子の能復曲なりし春めきぬ

三月六日 下萌句会

雛飾りたるより心華やげる待つ心どこかにありて春の雪流れ急そこにも水草生ふことも若者と話して心春めく日

三月八日 大阪倶楽部

手入れ行き届き過ぎたるもの芽よ春雷に気づかぬ人もをりし会もの芽や踏みさうにまた踏みさうに山笑ふとは今日のこと心添ふ春雷の朝が話題となりけり

三月八日 綿業倶楽部

暖かきことがせめてと思ひけり如月やその後の報せなきままにその後の消息尋ねたる臘如月の過ぎ易き日と思ひけり返らざる日々とて臘なりしかな

三月十日 清交社

色隠し切れぬ牡丹の芽なりけり応接間桃の節句にあけ渡す春の川小さき水音戻りけり薬外し牡丹の芽立ち明らかに

遠き娘の声聞く桃の節句かな今日よりは牡丹の芽に心置くつづりゆく一文ありて春めく日誘はれて誘ひし油断の節句かな春めくと思ひし油断の節句にけり春雷や遠き大地を近づけて春めきし一と日解放感のあり

三月十一日 工業倶楽部

春寒くともなつかしき顔集ふ春屋の迷ひしことも大都会人違ひされたる春の大都会

三月十三日 関東ホトギス同人会

甦る記憶は遠し春寒し又同じ春めく話題姉妹旅心よりはじまりし花心

三月十三日 関東ホトギス俳句大会

計画のはじまつておし花便三月の大会がまつお手本に明るさは春の都会の日曜日

三月十五日 有恒俳句会

霞みたる富士を見えねど見てをりし一稿を仕上げ霞を脱ぎて来し母子草野辺の明るさ纏ふ辺に雛に留守預けて今日も出掛け来し回復の待たるる友よ春寒し

三月十五日 無名会

雁風呂や癒えよと友へ祈りあり貝寄風に飛ばされしぬ友のことに

みちのくや意識雁風呂の話聞く

伝へ聞くばかり雁風呂物語語震災と別に雁風呂物語語午後よりは貝寄風荒るる岬と聞く

三月十六日 夏潮句会

雛納延ばし延ばして客を待つもう穴に戻らぬ蛇となりぬべし

三月十九日 ホトギス社春の吟行会

花誘ふ雨と思へば濡るるとも春めきてむすむす部屋模様替みよし野も雨ならむ花待たるる日

三月二十四日 きささぎ会

一人づつ来てどつと来て春の雨

三月二十四日 アネモネ句会

大試験より放たれし男かな又戻る陽気よ水の温みつ朝の雨止みて客待つ春灯

三月二十五日 時雨句会

つばくろの姿見かけぬ朝の冷春の水ここに伏流水となる旅心生れては消え春寒し

三月二十六日 句会と講演会

のどけしや半年前の怪我癒えて

三月二十六日 句会と講演会

焦点を合はせ吉野の花の旅ふときつねうどん食べたし春寒し

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十八年三月三日 蕉心会

フエラーリのやうな船往く川うらら  
釣針を数多沈めて水温む  
大川の水温みつつ歪みつむ  
船うららら 和風洋風中華風  
水温む船擦れ違ひすれちがひ  
顔うらら皺の増えたと妻の言ふ

三月四日 六甲会

庭師来て建築士来て大掃除  
草の芽に二十四節氣従へり  
名草の芽とは誇らしく慎ましく  
昨夜星と語り明かせし名草の芽  
草の芽に始まる庭の暦かな  
草の芽の解れて大地饒舌に  
故郷を離れ三十年大掃除  
留年の決まりし吾子や大掃除

三月五日 芦屋ホトギス会

芦屋川草の芽覚ましゆく水音  
春めける水音奏でて芦屋川  
地虫出づ庭の手摺に驚いて

三月六日 野分会芦屋例会

春場所や浪速にありし国技館  
ボルドーとグリーンアスパラガスと君  
こいさんに待る春場所砂被り

三月六日 青嵐会芦屋例会

夢といふ一字に押され大試験  
残る鴨芦屋市民になり切つて  
鉛筆の尖り過ぎたる大試験

引鴨を見送つてゐる湖面かな  
梅が香に溶け入る天使祝詞かな

三月七日 カトリック新聞選考吟

三月十日 土筆会

野遊や土手の起伏を使ひ切り  
江戸恋し水戸を恋しと田螺鳴く  
田螺取池の歴史を知り尽し  
名園の色を奪ひて冴返る  
父と子の絆深めて落第す

三月十三日 関東ホトギス同人会 大会

春寒に標本木の寡黙かな  
靖國の開花促す春時雨  
雲切れて花の遅速を問ふ日差  
大日本印刷本社ビルうらら

三月十四日 朝日カルチャー若草旬会

イースター近付けてゐる首都の空  
四旬節第一主日の花も黙  
日表といふ初花の目覚かな

三月十四日 朝日カルチャー若草旬会

流れ行く雛と目の合ふ刹那かな  
春の水東京湾を押し上げて  
菜の花に染め上げられてゆく羽音  
菜の花に少女の瞳持てさる君  
吊し雛未来もとも吊るされて  
恋心芽生えし我に山笑ふ

三月十五日 北國文芸選考吟

春の水とは緩やかに厳かに  
三月十七日 テレ朝旬会出演承諾返事

三月十七日 登高会

再会を約す喜び水温む  
大川は江戸のまほろば木流しす  
番傘にリズム刻みて春の雨  
物芽出づ高層ビルを見上げつつ  
ものの芽を引つ張り出してゐる日差

三月十七日 登高会

春雨にいとほん濡れて行かはず  
これよりは二人の未来山笑ふ

三月十七日 知人結婚祝

三月十九日 ホトギス社吟行会

水温む首都の喧嘩吸ひ込まれ  
初花に一步江戸城天守跡  
春泥の一步 江戸城天守跡  
春の雨江戸の品格仕上げゆく  
大会に吟行会に首都うらら  
大会の渦に地球の自転乗せ  
薇の風に渦解く刹那かな  
春水に指を浸して十字切る  
薇や大小斎の一品に

三月二十三日 目黒学園旬会

春めくや聖週間の静けさに  
太陽は第二の故郷揚雲雀  
口ザリオの珠繰る指の春めける  
虚子書きし墓碑ある寺や苗木市

三月二十六日 ホトギス社旬会

のどけしや聖土曜日首都の黙  
花ミモザ聖週間を淋しめず  
夜は星の精と語りし花ミモザ  
新幹線長閑に北へ伸び行ける  
イースター明日に句座てふ縁かな

三月二十七日 青嵐会東京例会

鳥語降る復活祭の昂りに  
花冷に芝公園の猫寡黙  
初花に動き出したる国の四季  
花筵もう敷かれたる一とところ  
花人といふも新入社員らし

三月二十七日 野分会東京例会

春場所や水都の歴史重ねつつ  
春場所や八百八橋軋ませて

三月二十七日 野分会東京例会

春場所や水都の歴史重ねつつ  
春場所や八百八橋軋ませて

# 雑詠 廣太郎 選

虚子疎開されたる林檎園案内 神戸 千原叡子  
 月草に狐嫁入る気配して 同  
 安否問ひくれし受話器に雷しきり 同  
 白菊を足して整ふ虚子の供華 同 山田佳乃  
 紫の供華の濃淡西虚子忌 同  
 標石三つに迷ふ秋の暮 同  
 春浅き風吉報を運び来る 東京 今井肖子  
 富士山の輝き遙か野火走る 同  
 ももいろにすぎとほる肉芹を巻く 同  
 七五三みんな笑顔にしてしまふ 奈良 古賀しづれ  
 一輪のための一年菊花展 同  
 菊花展咲ききらざるを見頃とし 同  
 身に入むや和綴ちの病間日誌閉づ 東京 田丸千種  
 落葉して昨日を消してしまふ街 同  
 先へ先へ上へ上へと綿虫は 同  
 吾亦紅ことばもたざるもの美し 熊本 岩岡中正  
 露けさを連ね死火山活火山 同  
 句帖には小さき鉛筆露けしや 同

山鳴りは二百十日の声なりし 米子 中村襄介  
 片鱗をちらと覗かせ望の月 同  
 一つ目の妖怪なるや月に雲 同  
 秋声や淋しさが耳聴くする 香川 湯川 雅  
 天高し雲の行方は雲の奥 同  
 秋思の背とは追ひたくて追ひ難く 同  
 ややちがふシンガポールの夏の雲 神戸 後藤比奈夫  
 マーライオン噴水国のシンボルに 同  
 林立のビルの中ゆくヨットの帆 同  
 水澄みて今日が一番縛麗な日 同 和田華凜  
 九度村は戦なき村豊の秋 同  
 火祭の照らす炎と焼く炎 同  
 秋蝶の風の軽さを見せよぎる 東京 橋本くに彦  
 青空や北半球の秋惜む 同  
 蔦もみぢ窓をステンドグラスにす 同  
 晴天の光を操作して蜻蛉 岡山 伴 明子  
 魔女時きしごとくに生えて毒茸 同  
 秋草や育ててくれし雨に折れ 同  
 秋晴や洗濯ばさみ色いろいろ 神戸 立村霜衣  
 山茶花の零れて浄められし夜 同  
 ラスクよく乾き十一月の音 同  
 孤独なる眉をへの字に案山子かな 福山 竹下陶子  
 うかうかと人の浮世を穴まどひ 同  
 台風の進路まぬがれたるもの 同

## 雑詠句評（二月号より）

一歩・さい雪・雅

公次・純也・くに彦

仁義・霜衣・佳乃

しげ人・廣太郎

### 人のことばかりを噂して夜なべ 福山 竹下陶子

此の句の季題の「夜なべ」は現在社会では古くなった言葉であり季題ではあるが、今でも所謂、田舎と言われる所には夜なべすることもあるのであろう。そしてその夜なべ話は、むかしは近所隣などまた、その土地柄のような話をしたものであったが、現在はテレビやスマホなどでその噂話などの小さなものはなくなり、世界のことや遠い外国のことも、今は夜なべ話になっているのであろう。このような遠い国の現在只今も分る世の夜なべ話を此の作者はこのように誠に平明に単純に詠ったことは、見事であり、平明にして余韻の大きな句と言えるのである。（一歩）

一人で黙々とする夜なべもあるが、恐らく家族が誰か起きていて、何かお喋りをしながらしているのだろう。気兼ねなく色々な噂話が出る仲の人と楽しい会話をしている様子が想像出来る。一人であるとしても暗くつらい印象のある季題であるが、それを明るく見事に詠んでいる。（廣太郎）

### 指差せば指に乗りたる遠花火 渡川 木暮陶句郎

遠くで花火が揚がった。「あつ、花火だ！」とその方を指さすと、まるで花火がその指先に乗ったように映った。音が届かない光だけの花火はあくまでも遠く、小さく見える。ある種の魔法にかかったように感じた。作者の不思議な感性が、花火をお伽話か童話の世界に引き込んで行く。これもまた俳句の魅力なのかも知れない。（さい雪）

丁度花火が揚がったところを指差すと、まるで指の先に花火が乗っているように見えたのである。よくカメラの前に掌を出し、遠景の富士山等を撮ると、まるで富士山が手の上に乗っているように写るといふ技法のようなものもあるが、一瞬の花火を捉えたところに一期一会の楽しさがある。（廣太郎）

〈以下略〉

天地有情

日子選

死の近き妻への感謝 長き夜  
 亡き妻へホーホー鳴らす瓢の笛  
 思ひ出すことを供華とし 十三夜  
 滅びゆくもの美しく未枯るる  
 代田水蝦夷に大地のある限り  
 漣の生れて代田の出来上る  
 句机に妍を競へる愛のチヨコ  
 神饌の毛瀬の甘しと国栖の奏  
 さわやかに脱稿と聞き称ふべし  
 秋風やたぎる闘志はなけれども  
 膝までがすぐ腰までに秋出水  
 徐行してくるる電車に見る花火  
 行秋や亡き宮様の話など  
 今日も柿むいてみるなり後ろ向き  
 羽とちて長き袴りの秋の蝶  
 筆硯の明け暮れにある秋のこゑ  
 新蕎麦とあらば一合二合では  
 冬紅葉とてこれからの色ばかり

仙台 赤川誓城  
 同  
 神戸 和田華凜  
 同  
 東京 稲畑廣太郎  
 同  
 神戸 後藤比奈夫  
 同  
 長岡 安原 葉  
 同  
 相模原 木村享史  
 同  
 東京 今井千鶴子  
 同  
 熊本 岩岡中正  
 同  
 神戸 三村純也  
 同

降り暗む一と日の暮れて秋の行く  
 かりそめの命宿せる菊人形  
 独り居の無音の中の秋の声  
 百日紅静かに池を統ぶるかな  
 虚子の軸抱へて露の館を訪ふ  
 木犀の香を潜りゆく庭深し  
 享保の世よりひひなの立ち給ふ  
 春寒き障子の内に病み給ふ  
 ゆく秋の心ひとしほ雨に濡れ  
 山荘の煖炉よく燃え落ちつきぬ  
 そこここに神御座す国春立ちぬ  
 思はざる起伏果てなき末黒野に  
 大政奉還 後変遷遠砧  
 色鳥や開け放ちある大書院  
 その経過聞きて身に入むばかりかな  
 ご日常知れば知る程身にぞ入む  
 日当れる冬草に腰おろしけり  
 気の合ひし友と散歩や花八手

東京 山田閨子  
 同  
 吹田 大橋 暁  
 同  
 宝塚 水田むつみ  
 同  
 福山 竹下陶子  
 同  
 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 同  
 東京 今井肖子  
 同  
 神戸 千原叡子  
 同  
 東京 河野美奇  
 同  
 我孫子 副島いみ子  
 同

# 行 秋 稲畑汀子

阪神淡路大震災のあった二年前、姑がなくなった後、兄弟四人で土地の分割をし、残った家の大部分を我々家族が引き継いだ。食堂のテーブルを修理に出して、その間に使うテーブルを見に行つた家具の展示場で、私の目を釘付けにした一脚の椅子があった。『伯父さんのアームチェア』と書かれた貼り紙が付いている。グレンチェックのゆつたりした大きな一人掛けの椅子である。

「これ、欲しいなあ」連れてきて頂いた建築家の好川さんが、ここに佇む私の側に来て、「買われたら如何ですか。欲しいと思った時が買い時ですよ」と勧められて値段を見た。三十万円と書いてある。

「うーん。家を曳いたり、補修したむして、儉約をしなければならぬのに、大丈夫だろうか」

「欲しいと思った時を逃すと後悔されますよ」

二階の風呂場の前に、少し広い廊下があつて、そこに置くことにした。東を向いて、昔からそこに置かれてあつたかのように存

在している。そこに座るとほっとする。一階ホールから二階へ上る階段の踊り場が見渡せるのだが、東から差しず朝の太陽は黄色い窓硝子を通して朝日を投げかけてくる。踊り場の壁にかけてあるウィリー・ザイラーの黄色い林の絵の額が正面になる。

「え？ 少し右に下がっているのではないかしら」

ひとり言を言いながら、とんとんと階段を降りて踊り場に掛かっている額の位置を直してみる。椅子に戻ると東の窓から差し込む朝の日差しはまだまだ厳しい。

毎朝五時を過ぎると新聞が入っていて、私の朝が始める。寝巻の上から大きなタオルで肩を覆い、お風呂場に行くと、湯船の栓をしてお湯の蛇口を開け、一階に降りる。玄関の鍵を開けて、郵便受にある新聞を取って玄関に戻ってくるのであるが、突っ掛けで寝起きの足がよろよろとしては踏み留まる。

「転ばないでくださいよ」

会う誰彼の声が聞こえる。

「勿論、気をつけていますよ」

新聞を抱え、突っ掛けが引つ掛かりそうになるが、踏み堪えるのも馴れている。

「もう、転びませんよ」

勝手口の鍵を開け、台所のブラインドを引くと、空が大きく展



ける。

「わあ、お天気だ」

大きなガラスを通して青空が光を投げかけている。薄々と雲が走っている。

食堂のカーテンを開け、新聞を定位置に置く。

書斎の雨戸を開け電気をつける。

「あーあ」

仕事が決山積んである。

「あーあ」

急いで二階へ戻ると、お風呂場に駆け込む。

「ああ良かった。まだ溢れていない」

歯ブラシに歯磨粉を付けて、私はアームチェアに座る。体がすっぽりと入り、歯を磨きながら、私の今日一日のことを頭のなかで組み立てて行く。

「あれ、やっぱり、額、少し右に下がっているように見えるわ」  
歯を磨きながら又とんとんと階段の踊り場まで降りて行き、位置を確かめる。

伯父さんのアームチェアに戻ると、またゆっくり歯を磨く。

「汀ちゃん、我々もう何時まで生きられるか分からない者が、仲よし四人で会ってお喋りしない？汀ちゃんのお宅に行くから、お昼のご馳走して下さい」親友からの電話である。

「今月、二十九日なら、朝、東京から帰ってくるから、いいわ」

急遽決まった予定をスケジュール表に書き加えた。

その日が近づいた頃、親友のPちゃんから電話があった。

「高知の美味しい梨を贈ったから、その時出してね」

「え？もしかしたら、昨日の我が家の句会で食べてしまったかも知れないわよ」

「うへえー」

今年も残り少ない日々となってきた。

